

黒野城主

加藤貞泰公の生誕地調査

|| 新史料で定説を覆す ||

『生国は濃州岐阜橋詰』

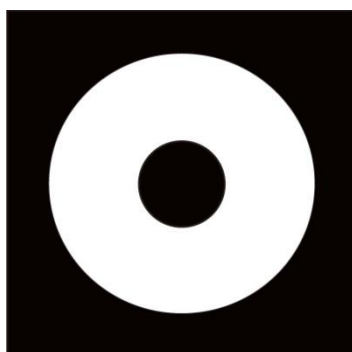
添付

加藤光泰生誕の地、七十貫所領の地を調査研究



加藤貞泰肖像画 大洲 龍護山曹溪院蔵

黒野城と加藤貞泰公研究会



加藤氏家紋 蛇の目紋

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	3
一、貞泰公生誕地の史料・・・・・・・・	4
（一）近江磯野村説・・・・・・・・	4
その1と4・・・・・・・・	4
（二）近江高島説・・・・・・・・	5
二、霊牌名簿から探る居住地・・・・・・・・	6
三、近江国磯野村を調査・・・・・・・・	7
四、高野山 伊予大洲加藤家墓所調査1・・	9
五、高野山 伊予大洲加藤家墓所調査2・・	10
六、貞泰生誕前後の父光泰動向・・・・・・・・	12
七、磯野にて生誕説は？・・・・・・・・	13
八、高島にて生誕説は？・・・・・・・・	13
九、貞泰公の母について・・・・・・・・	13
十、貞泰公母の住居について考察・・・・・・・・	14
十一、生誕地考察・・・・・・・・	14
十二、岐阜今泉村橋詰の地図・・・・・・・・	15
生誕地新聞記事・・・・・・・・	17
生誕の地案内板設置・・・・・・・・	21
引用文献・・・・・・・・	22
編集後記・・・・・・・・	23
添付 加藤光泰生誕の地・七十貫所領の地・・	24

はじめに

加藤貞泰公は加藤光泰の嫡男として天正八年に生まれる。父光泰が甲斐国二四万石のとき朝鮮で死去後、美濃国黒野城主四万石、伯耆国米子城主六万石、伊予国大洲城主六万石へと転封、豊臣・徳川両政権下を生き抜いた大名である。

加藤貞泰公の生誕地については、加藤家の家史に近江国磯野村と記されており、長年の間、磯野村が生誕地として定説になっておりました。

しかし、平成二六年（2014）、研究会員の座馬秀明氏が高野山の伊予大洲加藤家墓所を訪れ、貞泰公の五輪塔に「生國濃州岐阜橋詰」の刻銘を発見されました。

造立者は、貞泰公の嫡男の五郎八・大洲藩主泰興公で、貞泰の家督を相続して父を顕彰するために建てた墓である。

この刻銘発見は、加藤家の系譜上の新発見であり、大変驚いたものでありますが、正確性を確認する為に平成二九年（2017）、文献調査などを含め、高野山にて五輪塔の刻銘文字調査を行い、これらを報告書としてまとめました。

令和八年六月、生誕地附近の美江寺公園（岐阜市庁舎東）に「加藤貞泰公生誕の地」案内板を岐阜市の許可及び「岐阜市郷土の宝顕彰事業」にて設置しました。

その調査研究の第二版として発行します。

一、貞泰公生誕地の史料

(一) 近江磯野村説

加藤貞泰の生誕地は、加藤家の家史「北藤録」、「大洲秘録」に記載されています。

「北藤録」は、伊予史談会双書の第六集、大洲藩主加藤氏の家史である。第六代藩主加藤泰衡（やすみち）が家史の編集を念願し、桃井尚齊に命じ、各地の膨大な史料を収集・研究させること十五年にして、宝暦九年（1759）に編集を完了したものである。その出生記述箇所を抜萃してみました。

その1

「北藤録」巻之九 貞泰之伝（60頁）

一 加藤左近大夫貞泰ハ遠江守光泰ノ嫡男ナリ、幼名作十郎、初ノ諱光長トイフ。従五位下ニ叙シ、左衛門尉ニ任シ、其後改メテ左近大夫将監ニ任セラル。

一 天正八年庚辰（1580）江州磯野村ニ生ル。母ハ一柳藤兵衛女ナリ、室ハ但馬出石ノ城主小出播磨守吉政女ナリ 法号 法眼院殿亮悟日俊大姉、寛永十三年丙子（1636）六月十四日卒ス。武州本所日蓮宗寂教寺ニ葬ル。

その2

「北藤録」巻之十八 （233頁）

加藤世系（坤）

加藤豊後守重光 加賀守吉信男 二十一代之裔孫権兵衛景泰之嫡男。

女子 右近（濃州今泉橋詰人、姓氏・諱不レ伝）室。母姓氏不レ伝

光泰 作内・従五位下、遠江守、初諱景教

母同上。室一柳藤兵衛女、甲斐国主。天文六年丁酉（1537）ニ干濃州橋詰庄。……

その3

女子	加藤信濃守光吉室
女子	竹中丹後守重門室
女子	後に石河備後守光遠室
女子	村上太郎兵庫室
女子	冷泉中納言室
貞泰	作十郎、従五位下左衛門尉、後改任ニ左近大夫将監。
室小出播磨守藤原女、天正八年庚辰（1580）生ニ干江州磯野村。……	

他に江州磯野村生まれの記述は、「大洲秘録」の「加藤光泰貞泰軍功記」や、寛政五年（1793）〜文政二年（1819）



磯野の位置図



高島の位置図

に刊行の「群書類従」、「続々群書類従」(史伝部)に採録されている。

「大洲秘録」御家伝 光泰貞泰軍功 貞泰(27頁)

貞泰
光泰の嫡男 初作十郎 後従五位下に叙し 左エ門尉に任じ、其後改めて左近大夫将監に任ぜらる 天正八年庚辰江州磯野村ニ生る 母は一柳藤兵衛女なり ……其説詳かならず 文禄三年甲午 貞泰十五歳 甲州より濃州黒野^エ所替え四万石を領す……

その4

また、後世に編纂の「寛政重修諸家譜」巻七百七十四(寛政年間1789～1800)には天正八年近江国磯野村に生る。と記載あり、加藤家の家譜から引用されていると思われる。

(二) 近江高島説

伊予史談会双書の第七集「大洲秘録」は、大洲藩士人見栄智がいちおう元文五年(1740)に書き写し、安政六年(1859)に城戸三郎右衛門が謄写したもので、栄智は人見栄将の養子となり、第四代藩主加藤泰統(やすむね)及び次の泰温(やすあつ)に仕えた。

「大洲秘録」の御系図(35頁)には、

加藤左近大夫貞泰公

初作十郎 左エ門尉

濃州黒野城主 又伯州米子城主

天正八辰年江州高島ニテ御誕生 元和三年大洲城

ニ御移……

二、霊牌名簿から探る居住地

「紀州高野山講坊伝記ノ写」

加藤姓御代々霊牌之名簿 并因由略記

「北藤録」(104頁～107頁)

高野山講坊の再興の大檀主であったという加藤家の霊牌記録に、加藤景泰から貞泰に至る家史が見られます。その中から関係分を抜萃。

元亀元庚午歳(1570)十二月十五日

徳苗宗善居士

濃州岐阜橋詰加藤遠江守光泰公御建立、奉_レ為_ニ滋父_一

右は、光泰の父景泰の没年月日と戒名で、光泰が岐阜橋詰に在住の時に建立している。この頃は信長が岐阜に在城し、光泰は岐阜町近くの橋詰に屋敷があったことが読める。

慶長九甲辰歳(1604)五月二日

妙金禅定尼

加藤左衛門尉貞泰公御室

右は、貞泰の室(先妻)の没年月日と戒名である。年号と左衛門尉の名から、貞泰が二四才、黒野城に在城している時に亡くなられている。

元和九年癸亥歳(1623)五月廿二日

英叟雄公大居士

奉_レ為_ニ加藤左近大夫貞泰公_一、孝子五郎八泰興御建立。

於_ニ奥院_一御石塔一基御造立 高一丈余。

五輪塔

金欄打敷并幡一流御寄付。

右は、貞泰公の没年月日と戒名。貞泰の嫡男五郎八はこの時、元服前の十二才。この年、父貞泰の遺領大洲城地六万石を相続した。おそらくこの頃に五郎八は父貞泰公を顕彰するために石塔を造立と思われる。

高さ一丈(約三メートル)の五輪塔一基と寄附品目二点が奉納されている。

この石塔とは高野山の伊予大洲加藤家墓所に立つ五輪塔のことである。

この史料を基に、平成二六年五月、研究会の座馬氏が石塔を確認中に貞泰の生国地名が刻まれていることを発見した。

三、近江国磯野村を調査 平成二五年（2013年10月）

磯野村は、滋賀県長浜の北北西約十二キロメートル、小谷城から北西約六キロメートル、琵琶湖から東約二キロメートルに位置する村で、現在の高月町磯野である。

滋賀県の教育委員会に問合せをしたメール情報を以下に記す。

○ 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 城郭調査担当様

「近江国磯野村に残る加藤氏の痕跡について」

淡海の城友の会会報でお世話になって折ります。いつも楽しく見させて頂いております。

私は、美濃国黒野城の研究をしています。お尋ねする窓口が違うかもしれませんが、近江国の磯野村について調べています。

秀吉が長浜に城下を築いた後の天正八年（一五八〇）、家臣に加藤光泰がおり、光泰嫡男の貞泰が近江国磯野村で生まれましたと加藤家の記録に書かれています。磯野村にはそのような痕跡が残っているかどうか分からないでしょうか？

加藤光泰は、甲斐国二十四万石国主のとき文禄二年（一五九三）文禄の役で朝鮮にて死去し、四ヶ月後の文禄三年、嫡男の貞泰（幼名作十郎）が十四歳の時、黒野四万石に転封し黒

野城を築く。慶長十五年米子城に六万石で転封。元和三年大洲城に転封、初代藩主になり元和九年（一六二三）江戸屋敷で没（四四歳）。大洲藩は明治維新まで大洲藩の加藤氏が十三代続いた。

以上が加藤貞泰の概要です。お手数をかけますが、よろしくお願いいたします。 黒野城と加藤貞泰公研究会 副会長

河口耕三

●ご質問につきお答えいたします。

加藤貞泰が近江国磯野村で生まれたことについては江戸幕府が編纂した『寛政重修諸家譜』（大名・旗本に家の由緒について提出させたものを編纂したもの）に載っています。同書によれば、加藤光泰は近江北郡のうちに七百石賜り、とし書かれておらず、領地がどこか、居城はどこかは不明です。滋賀県が、かつて実施した中近世城館分布調査で、磯野村に城館があったことが確認されています。一つは磯野山城という山城で、磯野村の西にそびえる山上にあったといわれています。

伝承では浅井氏の家臣磯野氏（後に信長に寝返った磯野員昌の一族）の居城といわれています。現地に残る遺構も、堀や土塁・堀切を用いた、中世山城の構造を持っており、長浜城時代の秀吉家臣の居城としては、違和感があります。も

う一つは磯野館といい、磯野の集落内にあったようです。こちらについては所在地も含め、情報は何もありません。現況でも城跡の痕跡は皆無のようですし、城主についても分かりません。ただ、加藤氏がもし磯野村に居館を定めたというのであれば、こちらの方が可能性は高いと思います。

しかし、いかなせん城があったことすらよくわかりませんので、確かなことは何もいえません。

とりあえず、こちらで分かる範囲のことをお答えしました。ほとんど答えになっていないかもしれませんが、お許しください。なお、現地の情報等については、地元の長浜市の方が詳しいと思います。長浜城歴史博物館にお問い合わせになるはいかがでしょうか。

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課（城郭調査担当）

松下 浩

○長浜城歴史博物館 ご担当様

「近江国磯野村に残る加藤氏の痕跡について」

初めてメールを送らせて頂きます。松下浩様（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課）のご紹介でお尋ねします。…以下省略。

●長浜城歴史博物館の回答

「近江国磯野村に残る加藤氏の痕跡について」

高月町磯野の郷土史研究家は、加藤光泰が、磯野村で領地をもらった史料は、以前から認識しておりました。しかし、地元には本件について、まったく伝承がありません。

加藤光泰は、秀吉家臣団では重要な位置を占める人物と思いますので、今後、地元での顕彰活動を展開していくべきと考えています。

なお、地元にある城郭は、戦国大名浅井氏の重臣・磯野員昌の家に關するもので、加藤家とは無縁と見ていいでしょう。長浜城主秀吉の家臣たちは、長浜城内に屋敷はありましたが、それぞれの給所に屋敷を持っていたことは、常識的には考えられません。

以上、要件のみにて失礼します。

長浜城歴史博物館

太田浩司

四、高野山 伊予大洲加藤家墓所調査 1

平成二七年（2015）一月二四日 研究会発表資料

研究会員 座馬秀明氏

平成二六年（2014）五月四日、和歌山県伊都郡高野町にある真言宗高野山に行き、加藤家墓所の調査をされた。

奥之院にある弘法大師廟所までの参道は約二キロメートル。参道の両側には夥しい数の石塔が立ち並び、その中から加藤家の墓所を探すのは困難であった。幸い山内の案内書にて下掲の地図を見つけた。撮影の許可を得て写真に収め、これを頼りに加藤家墓所に辿り着くことができた。

高野山の墓石調査を行った座馬氏は、墓石が390年を経っており、文字全ての視覚判読が困難のため、不明文字は凹文字書体を指でなぞり解読された結果で、「岐阜橋詰」には大変驚いたものである。

しかし、目視や指の検証では不明瞭の為、第三者にて再度調査し、確認する必要性がありました。

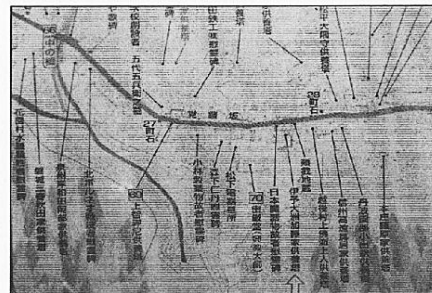
高野山加藤家の墓所

平成 27 年 1 月 24 日 座馬秀明

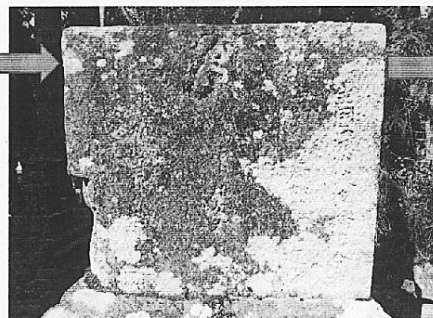
平成 26 年 5 月 4 日、和歌山県伊都郡高野町にある真言宗高野山に行き、加藤家墓所の調査をした。
奥之院にある弘法大師廟所までの参道は約 2 km。参道の両側には夥しい数の石塔が立ち並び、その中から加藤家の墓所を探すのは困難である。
幸い山内の案内所にて下掲の地図を見つけた。撮影の許可を得て写真に収め、これを頼りに加藤家墓所に辿り着くことができた。



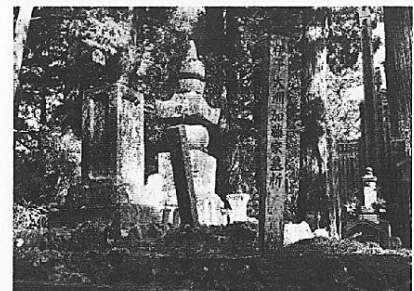
① 3基のうち1基は五輪塔。



伊予大洲加藤家供養塔



② 五輪塔の最下段部分の拡大。風化が激しく判読に苦労した。



伊予大洲加藤家墓所と記された標柱の奥に三基の墓碑があった。

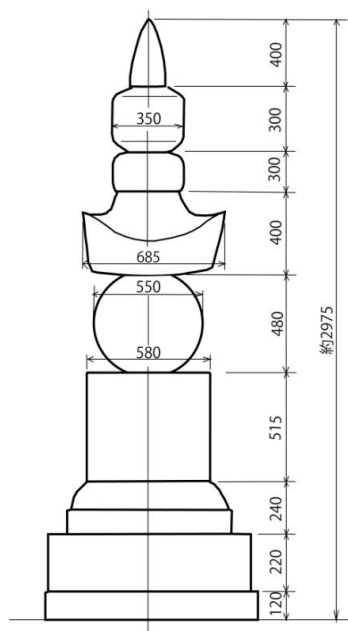
梵字
生國濃州岐阜橋詰今者
予劬大州為加藤左近殿
為英叟雄公大居士
孝子加藤五郎八造立之
元和九癸亥五月廿二日

貞泰公は岐阜で生まれた？

③ 加藤貞泰公の墓であることが判明した。

五、高野山 伊予大洲加藤家墓所調査2

平成二九年（2017）七月五日、高野山の加藤家墓所に研究会の四名（筆者・郷孝夫氏・高井勝氏・河島勝氏）にて岐阜から日帰りの調査に入る。雨が降りだし午後からの調査。高野山の霊木コウヤマキをお供えし、墓石を水洗。拓本で写すも長年の風化などで文字周囲の表面凹凸があり読み取れず、目視と写真撮影で文字を確認。座馬氏調査と一致したが、新たな文字も写真解読で判明した。



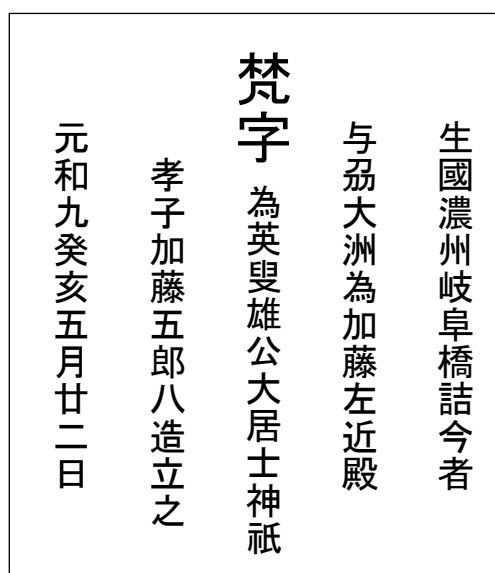
五輪塔スケッチ図

高さ約3メートルで高野山伝

記写しの1丈とほぼ一致



伊予大洲 加藤家墓所



五輪塔の原文



五輪塔 刻銘

（正面にのみ刻銘あり）

生國濃州岐阜橋詰今者



刻銘解釈

生國しょうこく（生まれ故郷）は濃州岐阜橋詰いまは（今泉村内）今者

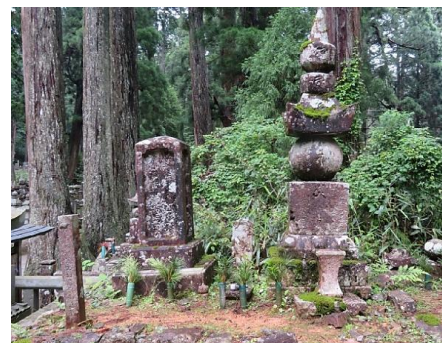
与予刃大洲加藤左近殿（大洲城主の加藤左近大夫将監・貞泰）

英叟雄公大居士神祇えいそうゆうこうだいこじじんぎ（加藤貞泰公の戒名に続いて神祇）の為に

孝子（親孝行の子供のこと、墓碑名などに子が自分の名の上に付ける語）
加藤五郎八（貞泰公嫡男・泰興公の幼名）が、父を供養する五輪

塔を造立ぞうりゅう

元和九年げんな みずのとい癸亥（1623）五月二十二日（貞泰公没年月日）



加藤家墓所

月光院殿御華瓶
げっこういんでんごけびょう



五輪塔前の華瓶

大洲藩主 加藤家御墓所



標柱

五輪塔左側の小さい墓は、宝永四年（1707）の大姉と童子の墓。左側は、天和二年（1682）と貞享二年（1685）の刻銘。全三基が並ぶ。



調査者：筆者・郷孝夫氏・河島勝氏・高井勝氏



中の橋から奥の院へ向かう道
中央奥が加藤家墓所

六、貞泰生誕前後の父光泰動向

（「北藤録」他より抜萃）

光泰年齢

光泰、始め齊藤竜興に仕える。

永祿七年（1564）二七 美濃三人衆が岐阜城開城。

この頃か、信長より三〇〇貫、秀吉に従う。

元亀元年（1570）三三 越前朝倉攻め。金ヶ崎の戦に与力。

十二月十五日光泰父の景泰権兵衛没

戒名法名徳苗宗善居士 濃州岐阜橋詰の光

泰が高野山に建立。

元亀二年（1571）三四 六月二十九日光泰母没。

元亀三年（1572）三五 浅井、朝倉の支城横山の砦攻略の功で同国

北郡の内磯野村知行七百貫、与力士十余人。

天正元年（1573）三六 浅井長政の小谷城攻め。桑名出陣。

長浜新城の普請に関わる。

天正二年（1574）三七 秀吉、長浜城入城。

天正三年（1575）三八 光泰、安土城築城に際し街道往還の警備

奉行を務める。

天正四年（1576）三九 織田信長、岐阜城から安土城に居館移す。

天正六年（1578）四一 三木城攻め。秀吉に属す光泰は播州在番。

天正七年（1579）四二 播州三木城攻め、丹波攻め、福知山討入り。

大垣 城持ちで周山・高島に屋敷(推定)

母は懷妊で岐阜屋敷 (推定)

天正八年（1580）

四三

貞泰誕生。（陰暦三月）母一柳藤兵衛娘。三木城攻略の功で秀吉から五千石賜る。

一書には播州姫路の城在番で一万石。

天正九年（1581）

四四

天正十年（1582）

四五

鳥取城攻めに参加。備中高松城攻め。本能寺の変で明智光秀と山崎合戦。

丹波国（京都）周山城主一万七千石となり初めて城持ちになる。

賤ヶ岳合戦、高島郡大溝城主、江州

天正十一年（1583）

四六

高島へ所替え二万石。

天正十二年（1584）

四七

犬山城在番、小牧山合戦。この年、貞泰弟光尚平内、近江国で誕生。

天正十三年（1585）

四八

大垣城四万石、秀吉による改易処分秀吉の弟秀長の郡山に預けられる。

以下省略

七、磯野にて生誕説は？

元龜三年（1572）、浅井、朝倉の支城横山の砦攻略の功で恩賞として同国北郡の内磯野村知行七百貫と十人与力士を賜る。天正二年（1574）秀吉が長浜に入城の頃、光泰も長浜の城下に屋敷があったと思われます。二年後の天正四年（1576）、信長が岐阜城から安土城に移っている。その四年後の天正八年（1580）に、長浜から北西十二キロメートルの距離がある磯野に母が住んでいたことになる。かつて、磯野は光泰の采地であったが、住んだ痕跡や貞泰の生誕資料は出ておりません。

八、高島にて生誕説は？

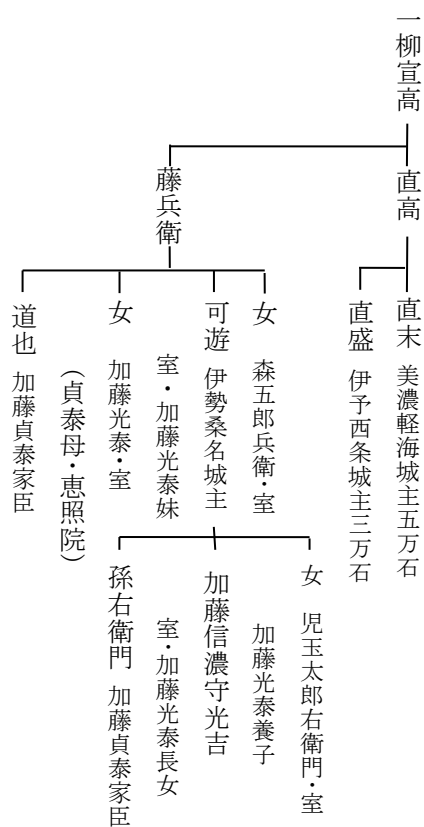
光泰の年代別の行動から見ると、貞泰公が生まれた天正八年（1580）から三年後に光泰が高島に入城となるため高島説は無さそうである。

尚、貞泰の弟光尚平内は、天正十二年（1584）近江で誕生と記されている。「北藤録」（240頁）。地名は書かれていないが、前年に光泰は高島城二万石で入城しているので平内は高島で誕生した可能性もあります。高島説は弟と混同された可能性も考えられます。

九、貞泰公の母について

貞泰の母（恵照院）の祖父は、一柳宜高で大永年間、豫州から美濃の厚見郡今泉村西野（西野村）村高十石余の田地を賜り）に移り、土岐頼芸に属し姓を河野から一柳に改める。厚見郡西野村に住み、方県郡の内、則竹村、厚見郡の日野村、今泉村を合わせて三百貫の地を領す。宜高の子は直高と藤兵衛。貞泰の母は藤兵衛の娘で、母の兄弟可遊や貞泰母は西野生まれと云う。加藤家とは姻戚関係が非常に深い。宜高は、頼芸が斎藤道三との戦で大桑退去後、一族は西野から池田郡（現揖斐郡）に移っている。

一柳氏系図



尚、参考として加藤光泰の生誕地は二説あり、濃州多芸郡橋爪説と厚見郡今泉村橋詰説がある。同名であるので混乱しているが、加藤家では厚見郡の橋詰を記載。美濃の史料などには多芸郡の橋爪を記している。

十、貞泰公母の居住地について考察

「北藤録」によると、光泰二六歳の永禄六年（1563）斉藤竜興に仕える頃、又は永禄十年（1567）頃、光泰は信長から三〇〇貫貫い秀吉の家臣になる。織田信長が岐阜城入城の永禄十年前後から光泰は、岐阜町の南に位置する今泉村橋詰に住んでいたと思われる。

天正二年（1574）、安土城天主が完成。天正八年頃は、父光泰は近江など各地を転戦中である。

信長が安土城に入場後、岐阜に居る家臣の家族らが安土城下に移ろうとしないで、信長命で岐阜の屋敷を焼き払い安土に來させたと言う話がある。貞泰誕生二年後の天正十年（1582）に本能寺の変が起きているが、その間の出来事であろうか。その天正八年（1580）に貞泰は出産している。

天正十年、周山城主一万七千石となり光泰初の城持ちまでは、光泰は各地の戦場を転戦しており、妻（貞泰母）は岐阜の光泰屋敷で生活していた、或いは出産で帰省していた。母の西野の実家は既に無く、西野と橋詰は約八〇〇メートルと直ぐ近くである。

十一、生誕地考察

◇生国記録を年代順に並べる◇

1580	天正八年	貞泰誕生
1623	元和九年五月二十二日	貞泰没 四四歳
1624頃	元和十年頃	貞泰嫡男五郎八（泰興） 高野山に五輪塔造立
1740	元文元年	「生國濃州岐阜橋詰」の刻銘 「大洲秘録」高島にて誕生
1759	宝暦九年	「北藤録」磯野村に生る

貞泰公の生誕地は、史料を時系列から見ると、生誕から最も近い史料は五輪塔の刻銘である。貞泰の嫡男五郎八（泰興）が、貞泰死去後に遺領予州大洲藩の家督を相続。弟の直泰に新谷藩一万石を内分している。元服前の五郎八は高野山に父を想い五輪塔を造立。

「北藤録」の編集完了は宝暦九年（1759）で元和九年（1623）の貞泰没後から一三六年後の編集になる。

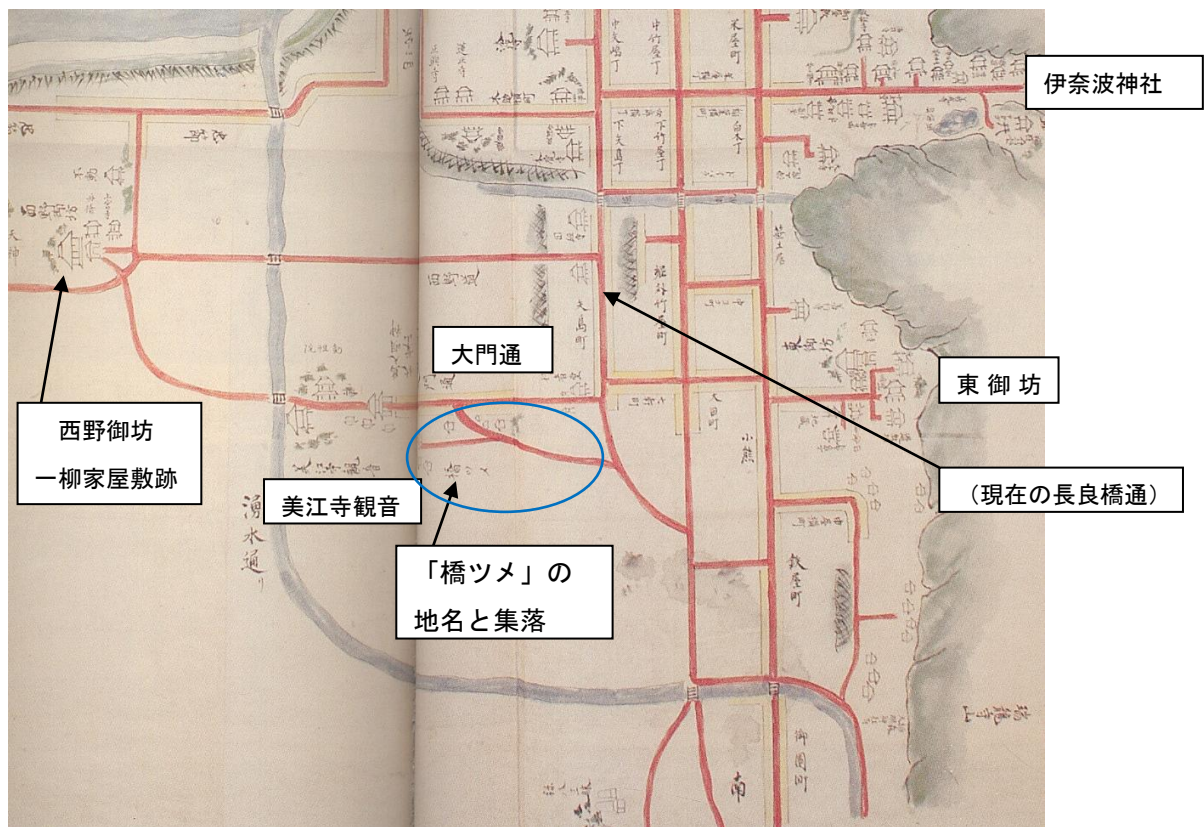
前記の「高野山講坊伝記ノ写」には、生国の記載が無い。ため、「大洲秘録」「北藤録」編纂の時には、江州高島や磯野にて御誕生となり、岐阜橋詰が出生地にされなかったと推察。

どちらを信頼するかとなれば、五郎八が建立した「生國濃州岐阜橋詰」の刻銘の方が信頼性が高いと考えます。しかも嫡男が建立している第一級の一次史料であります。以上の調査・研究成果を踏まえて、生誕の地は、「濃州岐阜橋詰」で今泉村の内であると確信します。

十二、岐阜今泉村橋詰の地図

「日本地名大辞典」

今泉村は近世の江戸時代く明治三十年の村名。美濃国厚見郡のうち。はじめ幕府領大久保石見守支配、元和五年より尾張藩領。村高は「慶長郷牒」一〇三〇石余、「正保郷帳」「天保郷帳」「旧公旧領」は共に、一〇四〇石余り（うち田方四石余・畑方一〇三六石余・茶年貢三斗余・野年貢二斗）当村の布屋町・七軒町・太田町は岐阜町より続く町屋である。「濃州徇行記」によれば、寛政頃の戸数二九五うち縮緬織屋二・檜笠を製する家二、人口一〇一四、馬二匹。また村民は農間に岐阜町で日雇稼ぎをした。当村は貞享三年三月の大火で岐阜町とともに壊滅的な打撃を受けている。神社に一柳氏産土神の八梅天神、寺に天台宗大日山観昌院美江寺・曹洞宗実徳山本覺寺・日蓮宗三融山円経寺がある。美江寺は、織田信長が本巢郡十六条村より岐阜の繁栄策として本尊十一面観音を移して建立。



「濃州岐阜絵図」部分 江戸時代後期 岐阜市歴史博物館蔵（陶玄亭コレクション）



今泉村 「維新时期所領区分図」部分
「平成 25 年 岐阜市歴史的風致維持向上計画」
図 I-22 より引用

橋詰はこの辺り（円内）

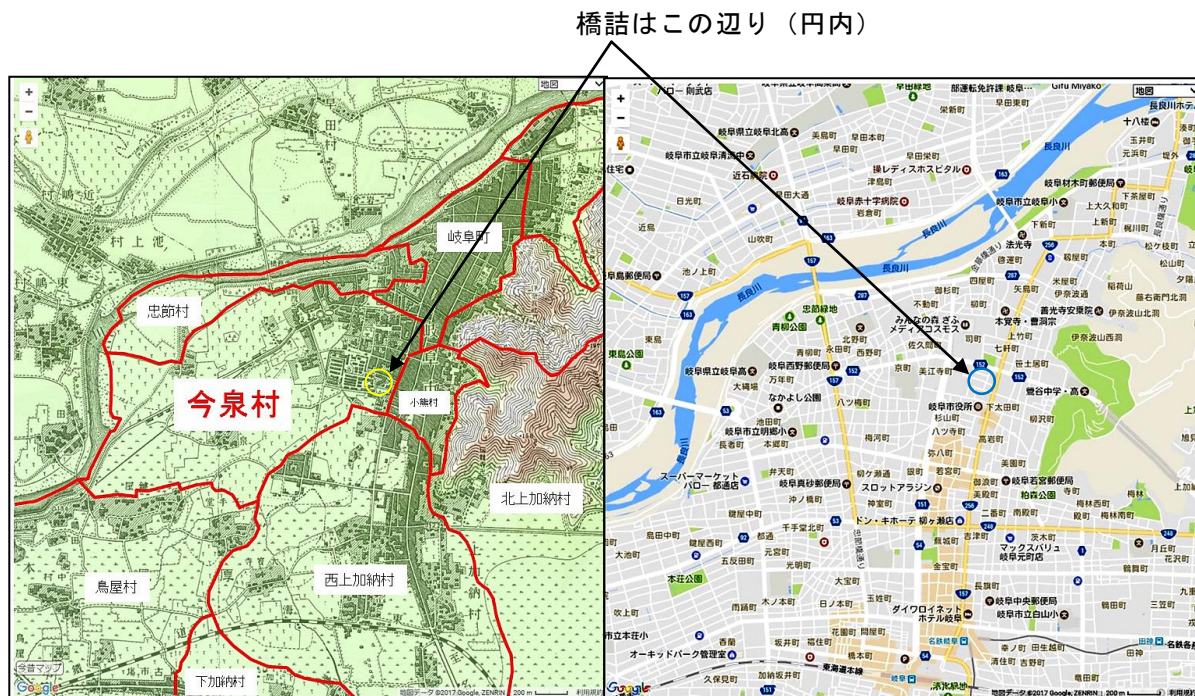
小熊村

端詰町（はしづめちょう）

近代 明治 42 年～現在の岐阜市の町名。
もとは今泉のうち。字七軒町・字美江寺
町・字橋詰町・字鷹見の各一部。昭和 5 年
の戸数 93、人口 347、同 40 年世帯数 90、
人口 384。

現在の端詰町

1 番地～62 番地のエリア
（岐阜市庁舎の南東、）美江寺公園の南、
岐阜地方裁判所の東）



橋詰はこの辺り（円内）

明治 24 年岐阜地図（大日本帝国陸地測量部）
「今昔マップ」より

現在の岐阜市地図」@2017 Google

- ・明治 24 年地図上に明治維新时期の今泉村村境を記入
作成：研究会 篠田哲郎氏

■生誕地新聞記事 2017 年（平成 29 年）

中日新聞 2017 年（平成 29 年）8 月 5 日（土）

2017 年（平成 29 年）8 月 5 日（土曜日）

乗 舟 月 日

四

中

安土桃山時代の1594年に黒野城（岐阜市黒野）を築いた武將、加藤貞泰（1580～1623年）の生誕地が、「美濃国岐阜」だった可能性が高いことが、

地元の民間研究会の調査で分かった。これまで「近江国」（滋賀県）とされていた定説が覆された。

（北村希）

加藤貞泰は 黒野城築いた武將 岐阜生まれ？

調査した「黒野城と加藤貞泰公研究会」によると、会員の一人、座馬秀明さん（62）が二〇一四年、貞泰の長男が高野山に建てたといふ貞泰の墓「五輪塔」を訪問。こけで覆われた石の側面を指

研究会の 墓の刻銘発見



高野山にある加藤家墓所。右が五輪塔＝黒野城と加藤貞泰公研究会提供



調査成果をまとめたパネルを示す河口会長。右が墓の刻銘の写真＝岐阜市役所で

（現・岐阜市端詰町）の刻銘を発見した。今年七月五日、河口耕三会長（69）と四人が訪れて表面の汚れをきれいに落とし、再確認した。

一七五九年に編集された加藤家公式の家史「北藤録」では、貞泰の

生誕地について「江州磯野村（現・滋賀県長浜市）二生八」とあり、これまで磯野村が定説となっていた。

五輪塔は貞泰が亡くなった一六三年直後に建てられたため、岐阜市教委の担当者は「より貞泰の時代に近い新史料で、信ぴょう性が高い」としている。

研究会は七月に今回の調査成果を冊子にまとめ、県図書館と市立図書館に配置したほか、研究会のホームページでも公開している。河口会長は「地元出身の武將がいたということが確認できてうれしい。今後も顕彰活動に励みたい」と話した。

第3種郵便物認可

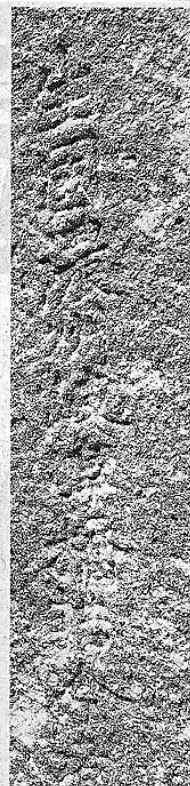
岐

阜

黒野城築いた一代限りの城主



加藤貞泰は 岐阜市出身



五輪塔側面に彫られた「生國濃州岐阜橋詰」の文字。和歌山県高野町、高野山(黒野城)と加藤貞泰公研究会提供

戦国末期から約15年、岐阜市黒野地区に存在した黒野城と二代限りの城主加藤貞泰を

高野山の五輪塔に記述

顕彰団体調査「滋賀県説」覆す

貞泰は1580(天正8)年に生まれ、94年に黒野城を築き美濃国黒野4万石を治めた。その後は米子(鳥取県)や大洲(愛媛県)の藩主となり、1623(元和9)年に44歳で亡くなったとされる。

生誕地は、1759(宝暦9)年に加藤家臣が編さんした「北藤録」などから、これまで江州磯野村(現在

「加藤貞泰画像部分」(龍護山曹溪院蔵)

の滋賀県長浜市高月町磯野)が定説とされてきた。他に、江州高島(現在の滋賀県高島市)の説もある。

2014年5月、同会会員の座馬秀明さん(46)＝岐阜市御望＝が、貞泰の嫡男五郎八(北藤録に、高野山(和歌山県高野町)に加藤家の墓がある旨の記述を見つけた。現地には記述通り高さ1丈(約3尺)の五輪塔があり、縦51センチ横58センチの側面には「生國濃州岐阜橋詰(生まれ故郷)」と記述されている。同会の調査団が先月調査し、報告書をまとめた。河口耕三会長は「地元の武將がいたことは喜ばしい。今後も顕彰活動が続けたい」と話している。

近世史に詳しい犬山城白帝文庫(愛知県犬山市)の寛真理子主任学芸員は「生地について嫡子によって建立された墓碑に着目して確定したのは大きな成果」とコメントしている。

報告書は県図書館や岐阜市立中央図書館などで閲覧できる。

岐阜



情報をお寄せ下さい

岐阜支局

〒500-8463 岐阜市加納新本町3-1
058-275-4166 FAX058-276-9969
メール gifu@yomiuri.com

通信部

大垣 0584-74-6161

多治見 0572-24-0091

中津川 0573-66-1180

下呂 0576-52-3392

高山 0577-33-1040

ホームページ http://www.yomiuri.co.jp/chubu/

社会グループ 052-211-1151

読者相談 052-211-1009

社内見学申し込み 052-211-0059

販売部 052-211-0037

購読は
Y 0120-4343-81

【広告申し込み】

読売エージェンシー東海
052-204-1361

【折り込み申し込み】

読売 I S 岐阜営業所
058-276-87588月6日(日曜日)
旧 6月15日<友引>月齢13.7
(正午)

あすの暦

岐阜	名古屋
5.05	5.05
18.52	18.51
17.48	17.47
3.25	3.25
	4.35
	17.56
	11.18
	23.35
	(大潮)

加藤貞泰は「岐阜生まれ」

黒野城主の定説覆す

市民団体 高野山の墓で史料確認

岐阜市の黒野城主を務めた加藤貞泰(1580～1623年)を研究している市民団体「黒野城と加藤貞泰公研究会」は4日、貞泰の生誕地は、美濃国橋詰(現在の岐阜市)とする史料が高野山(和歌山県)にある貞泰の墓で確認されたと発表した。研究会は、「近江国磯野村(現在の滋賀県長浜市)生まれ」という定説を覆す内容」としている。

貞泰は晩年、伊予国(愛媛県)に転封され、大洲藩初代藩主となった。1759年に作られた藩の公式記録「寛政重修諸家譜」にも同様に記されている。



高野山にある貞泰の墓には「生国濃州岐阜橋詰」と刻まれている(「黒野城と加藤貞泰公研究会」提供)

加藤貞泰 美濃(岐阜県)出身の戦国武将・加藤光泰の嫡男。光泰の死を受け、1594年に家督を相続。豊臣秀吉によって、黒野4万石の領主となる。関ヶ原の戦いでは前哨戦では西軍についたが、本戦で徳川家康方につき、領土を安堵(あんど)された。その後、米子(鳥取県)6万石を経て、大洲6万石の領主となる。大洲藩加藤氏は明治維新まで続いた。

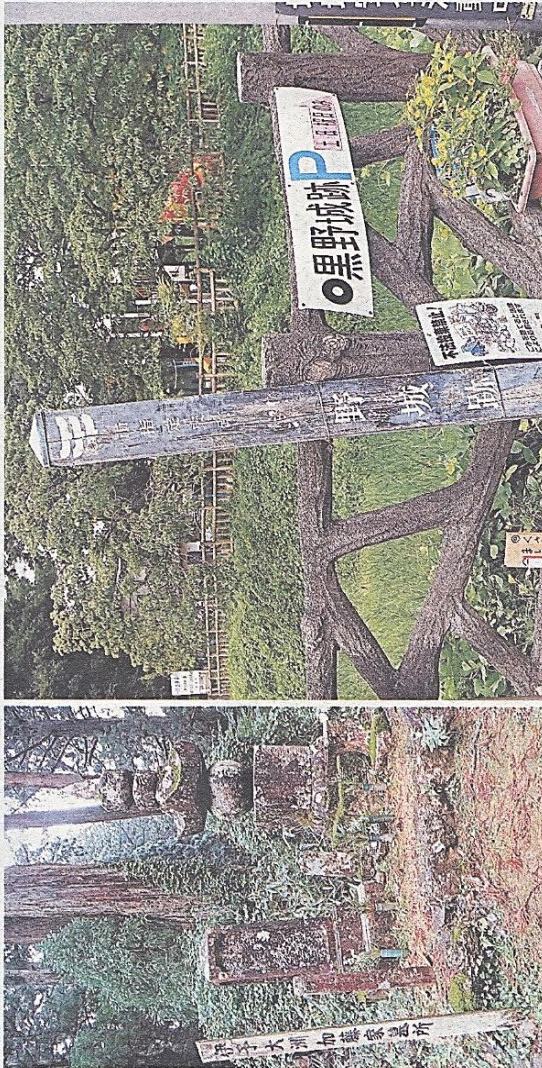
しかし、2014年、貞泰の墓を調べた研究会の座馬秀明さん(46)が、墓に彫られた文字の中に「生国濃州岐阜橋詰」とあるのに気付いた。真偽を確かめるため今年7月、研究会の河口耕三会長(69)らが墓を磨いて調査し、判読したという。

墓には貞泰の長男、泰興の幼名・五郎八の名前が彫られていた。泰興は遺領相続時に12歳だったことから、墓は貞泰が病死した直後に、泰興が建てたとみられるという。

「岐阜橋詰」は現在の岐阜市端詰町で、市役所のすぐ北側にあたる。河口会長は、「貞泰の父の領地が当時、磯野村内にあったと記録されていることから、そこで生まれたと、当時の人たちが勘違いしたのではないかと。戦国時代は、家族を故郷に残して単身で赴任する武士も多く、貞泰の父もそうだったのでは」とし、「黒野城を作った貞泰は、実は岐阜市出身だったと大いに宣伝していきたい」と話した。

黒野城主 実は地元生まれ？

戦国時代から江戸時代初期にかけて岐阜市にあった黒野城。城主・加藤貞泰(1580～1623)の出生地はこれまで滋賀県とされていたが、実は岐阜市生まれだったことが分かった。地元歴史愛好家グループが黒野山のこけむした墓を調べたところ、岐阜市生まれを裏付ける銘文を見つけたという。



⑤現在の黒野城跡。お堀や本丸跡が残っている＝岐阜市黒野
⑥黒野山にある加藤貞泰の墓。五輪塔(右)に岐阜市生まれを裏付ける銘文があった＝いずれも黒野城と加藤貞泰公研究会提供

岐阜の歴史愛好家らが発見

墓に裏付け銘文、滋賀説覆す

「黒野城と加藤貞泰公研究会」の河口耕三会長(69)によると、3年前に会員の座馬秀明さん(46)が和歌山県高野町にある貞泰の墓を訪れた際、石に「岐阜」らしき文字が刻まれているのを見つけた。

そのときは全文は読めず、今年7月に他の会員と再訪。タワシで墓を磨き、「生国濃州岐阜橋詰」の文字を読み取った。「岐阜橋詰」は、現在の岐阜市端詰町にあたるという。

貞泰は豊臣秀吉の家臣だった光泰の子。1594年に秀吉の命で甲府城から黒野に移り、1610年には徳川幕府の命で鳥取の米子城へ。さらに17年、伊予大洲藩主として大洲城に入城した。

貞泰の出生地は、江戸時代に大洲藩で編まれた家史に光泰の領地があったとされる近江国磯野村(現在の滋賀県長浜市)という記述があり、これが定説とされてきた。しかし、家史ができたのは貞泰の死後100年以上経ってからで、死後まもなく刻まれたと推定される墓石の銘文の方が信頼できるという。

岐阜の歴史に詳しい大山城百帝文庫の眞真理子主任学芸員は「加藤家の家史などにある記述がそのまま引き継がれていたものを、没後最も近い時期に嫡子によって建立された墓碑に着目して確定したのは大きな成果」と評価。河口会長は「今年は貞泰公が大洲に入って400年。記念の年に発見ができて感慨深い。地元生まれの城主をもっと多くの人に知ってほしい」と話す。(山野拓郎)

高野山の墓に刻まれた「生国濃州岐阜橋詰」の文字



■生誕の地案内板（美江寺公園内）2026年（令和8年）6月設置

戦国武将 黒野城主 加藤貞泰公生誕の地



加藤貞泰公肖像画
大洲龍護山曹洞院蔵

加藤貞泰は、天正八年（1580）、豊臣秀吉に仕えた
美濃武将加藤光泰（1537〜1593）の嫡男として
濃州岐阜今泉村橋詰（現在の美江寺公園の南側）で生ま
れました。母は、今泉村西野の一柳藤兵衛の娘。

貞泰誕生の地については、従来加藤家の家史に江州（滋
賀県）磯野村が定説でしたが、研究会の高野山加藤家墓

所の調査（平成二七年、二九年）で二代目藩主泰興が父親供養のため建立した五輪塔に
「生国濃州岐阜橋詰」の刻銘を発見しました。

濃州岐阜橋詰は織田信長が命名した岐阜城下町入口の今泉村内で、現在地南側の端
詰町辺りになりますが屋敷跡は現存しません。

甲斐国二四万石の光泰が文禄の役で、朝鮮にて死去し、貞泰は文禄三年（1594）、
秀吉の命で四万石に減封され生国美濃へ国替えとなり、黒野城を築き初代城主とし城
下まちづくりにつとめました。

在城期間中の慶長五年（1600）、関ヶ原合戦があり、東軍徳川家康に味方して、
黒野城と四万石は安堵されました。合戦後は領内の治水事業に尽力し耐殿堤を築きま
した。生涯で最も長い在城十六年間でありました。

その後、徳川の時代となり、黒野城は廢城になり、慶長十五年（1610）二万石加増
の六万石で仕着国米子（鳥取県）に転封。元和三年（1617）大坂の陣の功績により伊
予国大洲（愛媛県）六万石へ封じられました。

元和九年（1623）江戸屋敷にて四四才で病死しました。大洲藩の加藤氏は貞泰が
初代で明治維新まで十三代二百五十年続きました。



濃州岐阜絵図（部分）江戸時代後期 岐阜市歴史博物館所蔵
上絵図凡そ範囲 橋詰 この辺り



生国濃州岐阜橋詰

高野山
伊予大大洲藩
加藤家墓所
五輪塔部分



明治24年岐阜地図に村界表示



現在の端詰町

令和八年（2026）六月

設置者 黒野城と加藤貞泰公研究会
岐阜市郷土の宝顕彰事業にて設置

■引用文献及び御協力者

史料（刊本）

- ・「北藤録」伊予史談会双書第6集
- ・「大洲秘録」伊予史談会双書第7集
- ・「寛政重修諸家譜」第十三
- ・「角川日本地名大辞典 岐阜県」

書籍・論文・古書等

- ・「大洲藩主加藤家の墓所」大洲市立博物館発行
 - ・「加藤光泰貞泰軍功記他（語釈付）」郷孝夫著
 - ・「加藤姓御代々霊牌之名簿 並因由略記」「北藤録」より河口耕三研究会発表資料（2013・7）
 - ・「高野山加藤家の墓所」座馬秀明 平成二七年研究会発表資料
 - ・「謎の武将一柳右近太夫可遊」児玉和男著 伊予史談会309号
- 伊予大洲藩一柳系図

絵図・地図

- ・「加藤貞泰肖像画」大洲龍護山曹溪院蔵
- ・「濃州岐阜絵図」岐阜市歴史博物館蔵
- ・「岐阜市歴史的風致維持向上計画」〔図I・22維新期所領区分図〕
- ・「今昔マップ」明治二四年岐阜地図と現在の岐阜市地図（@2017 Google ZENRIN）

写真

- ・高野山 伊予大洲加藤家墓所

新聞記事

- 中日新聞社
- 岐阜新聞社
- 読売新聞社
- 朝日新聞社

御協力者

- ・滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 松下浩氏
- ・長浜歴史博物館 太田弘司氏
- ・座馬秀明氏・郷孝夫氏・篠田哲郎氏・高井勝氏・河島勝氏（黒野城と加藤貞泰公研究会）

■編集後記

戦国時代、岐阜で生まれた加藤貞泰は、父光泰没（五六歳）後、光泰の遺言をもとに秀吉の命で大幅な減封となったが、甲斐国から黒野城主四万石で美濃岐阜へ里帰りが出来た。その後、米子城、大洲城へと移り江戸にて没する（四四歳）。

加藤貞泰公の生誕地調査の基は「北藤録」です。加藤家の詳しい家史の存在のお陰で深く調査・研究が出来ました。

生まれた故郷は、今まで定説であった近江磯野説から、濃州岐阜の橋詰であると確信を得ました。ひとえに関係各位皆様の御協力があつての成果と考えております。

これからは、岐阜で生まれた武将として名乗りを挙げることにしました。郷土で誕生した武将として、誇りを持って顕彰活動に取り組んでいきたいと考えております。



黒野城主

加藤貞泰公の生誕地調査

Ⅱ新史料で定説を覆すⅡ

『生国は濃州岐阜橋詰』

初版 平成二九年（2017）七月十五日

第二版 令和八年（2026）六月

発行 黒野城と加藤貞泰公研究会

作成 研究会会長 河口耕三

☎ 090・1786・6564

メール kouzo301@yahoo.co.jp

加藤光泰生誕の地・七十貫所領の地を調査研究

1



加藤光泰画像

加藤貞泰の父光泰は景泰の嫡男として美濃国で生まれた。生誕の地及び七十貫を領した地の記述は、文献や書籍に美濃国厚見郡橋詰と美濃国多芸郡橋爪に分かれている。同じ美濃国内であるが、加藤氏については、あまり研究が行われていない。また加藤氏のルーツを含めて、生誕の地などの違いを解明したいと考え調査を行った。文献や書籍は、図書館や機関誌など記述資料から引用した。これらを以下の表に分類して一覧表にしました。

加藤光泰生誕地 文献・書籍一覧表（順不同）

美濃国厚美郡を記述

No.	文献・書籍名	頁	標題	記述(原文)	備考
1	北藤録 伊予史談会双書 第6集 宝暦9年 (1759)に15年の 年月を要して完了 昭和57年初版発行	29	卷之五 光兼之伝	一 大永元年……御所ノ下知ニ背ク。此時景秀兄弟関東ニ在テ其功成カタキヲ察シテ、兄景秀ハ美濃国ニ赴キ、弟元次ハ摂州ニ赴ク。 一 景秀ノ男ヲ権兵衛尉景泰ト云フ。美濃国橋詰ノ庄ニ住居シテ七拾貫ノ地ヲ領ス。 一 景泰に一女三男アリ。女子ハ同州今泉橋詰ノ住人右近 姓氏伝ハラズニ嫁ス。嫡男ヲ作内景教ト云フ、後光泰ト改メ……	・「北藤録」は、大洲藩六代藩主泰衡(やすみち)が家氏の編集を念願し収集・研究させること15年にして宝暦9年(1759)に編集を完了したもの ・美濃国橋詰ノ庄と同州今泉橋詰は同一地を表示したと思われるが、別の地にもとれる
		30	卷之六 光泰之伝上	天文六年丁酉、美濃国厚見郡今泉村橋詰ノ莊ニ生ル、世々此庄ニ居テ七十貫ノ地ヲ領セリ。家説ニ、当家ハ昔時安房国ヲ領知ス、北条家ノ為メニ房州ノ居城ヲ没落シ、夫ヨリ濃州ニ住スト云フ。	・今泉村の記述
		233	卷之十七 加藤世系(乾)	景泰 加藤権兵衛尉 於ニ美濃国橋詰一庄領ニ七拾貫之地。	・美濃国内の厚見郡、多芸郡どちらにもあてはまる
		233	卷之十八 加藤世系(坤)	加藤豊後守重光加賀守吉信男二十一代之裔孫権兵衛尉景泰之嫡男。光泰 ……天文六年丁酉生ニ于濃州橋詰庄。	・濃州内の厚見郡、多芸郡どちらにもあてはまる
		254	卷二十 家臣世系 大橋氏系	大橋一右衛門 美濃国多芸郡金谷ニ生ル。右大臣織田信長公ニ仕ヘテ三万石ヲ領ス。	・一右衛門嫡男の大橋長兵衛は、秀吉から光泰に付けられた与力士十余人の頭で後に光泰の家長になる
2	大洲秘録 伊予史談会双書 第7集 元文5年(1740)に書き写し 昭和58年初版発行	10	一 御家伝 朝鮮国渡海三加藤	鎌足苗裔鎮守府将軍利仁九代後胤加藤景員長男加藤左衛門太夫光貞 十四代孫加藤権兵衛尉景泰長男甲斐国主加藤遠江守光泰	・「大洲秘録」は、大洲藩士が元文5年(1740)に書き写し
			一 御家伝 光泰貞泰軍功 光泰	姓は藤原氏 加藤家紋蛇ノ目紋上リ藤 其先祖を尋れハ、左大臣魚名六代孫利仁将軍苗裔左衛門太夫加藤光貞之後裔権兵衛尉景泰之嫡男也 母ハ濃州ノ人 其姓不詳 光泰 名は作内 初ノ諱ハ景教 後從五位下に叙し 遠江守に任せらる 天文六年丁酉 美濃国厚見郡今泉村橋詰ノ庄に生る。世々此庄に居テ七十貫之地を領す 一説ニ当家ハ安房国を領知す 其後北条か為に房州ノ居城を没落せられ夫より代々濃州ニ住すと云	・家伝に今泉村の記述

No.	文献・書籍名	頁	標題	記述(原文)	備考
3	加藤光泰貞泰軍功記 明治40年国書刊行会1907	7	光泰	姓は藤原、名は加藤、家紋蛇の目上り藤、先祖を訪ねれば、左大臣魚名六代孫、利仁將軍苗裔、左衛門大夫加藤光貞の後裔、権兵衛尉景泰はの嫡男や、母は濃州の人、其姓氏詳ならず、光泰名は作内、初の名乗景教、後從五位下に任じられる、天文六年丁酉、美濃国厚見郡今泉村橋詰の庄に生る、世々此庄に居て七十貫の地を領す、一説に當家は安房国を領地す、その後北條が為に房州の居城を没落せり、去より代々濃州に住すといふ、光泰男ぶり大いにいかめしく、勇力人に勝れたり、初濃州に於てかつひさといふ人に仕ふ、…龍龍を初めかつひさといひしや…かつひさ没落後、光泰彼地をさり、江州に蟄居するを、秀吉公聞召招られ、此由を信長公へ仰上られ、即秀吉公御披露にて、光泰初て信長公へ御目見す、其時信長公仰にて、光泰を秀吉公へ下さる…	・家伝に今泉村の記述
4	美濃国古跡考 飛騨国古跡考 美濃国古代人物語 吉岡勲著 昭和63年発行 岐阜県郷土出版社	157	美濃国古代人物語 卷之三 加藤作内 藤原光泰	貞泰トモ、從五位下・左衛門尉・右近大夫、天正六年(1578)戊寅入城、同八年(1580)庚辰マテ在城三年、加藤権兵衛尉景泰嫡子、加藤遠江守光泰、天文六年(1578)丁酉濃州厚見郡橋詰之庄今泉生、世此庄住、而斎藤右京大夫竜興ニ仕フ、領七千貫地、二人之子アリ、嫡子光貞・二男光直ト云、竜興没落之後、光泰此之地ヲ去、江州蟄居後、仕秀吉公、領甲州、……。右ハ天明四年(1784)辰七月、加藤遠江守殿江戸留守居戸田庄倉ヨリ、加藤家家譜抜書来リ、…	・天正年間在城三年とはどこの城？ ・七千貫は七百の誤。 ・天明四年(1784)の加藤家家譜抜書は詳しい
5	愛媛県史	449	大洲藩 藩祖加藤光泰	大洲加藤家で先祖としている貞泰の父光泰について「北藤録」によってみよう。光泰は藤原鎌足の十二代の孫(北家)加藤豊後守重光二一代の裔孫加藤権兵衛尉景泰の嫡男で、美濃国厚見郡今泉村橋詰の庄に生まれた。はじめ美濃国主齋藤竜興に仕え…	・加藤家家史「北藤録」に準ずる
	美濃明細記 昭和7年発行・44年復刻発行	227	加藤系 藤原光泰	加藤遠江守、始名作内 生ニ於濃州厚見郡今泉村の内橋爪一仕ニ信長、秀吉ニ有二軍功、天正十三四年頃大垣在城…	・今泉村の橋爪記述
		228	(同上) 貞泰	加藤左衛門尉 左近大夫 始名作十郎……天正頃加藤太郎左衛門者光泰の一族也、當時美濃之中領主加藤平内此一族也、一柳監物直盛之弟法泉坊を光泰養ニ育之稱ニ加藤圖書ニ今泉に住す。	
6	城 No.81-98(昭和51年) 東海古城研究会 郷浩著		黒野城略史	城主加藤左エ門尉貞泰の父を作兵衛光泰といい、岐阜市橋詰町の産とある。豊臣秀吉に士官し、秀吉のボディガード役をつとめていた。	
7	美濃古城跡 稲葉郡黒野尋常小学校 大正10年頃作成 (岐阜市彦坂 神谷慶男氏提供)		黒野城	加藤氏系譜から引用 ……6世の孫七郎景助足利尊氏に仕え、美濃国大野郡黒野を賜り、足利氏に仕う。民部左衛門尉景重土岐頼益に属し、4世左衛門尉光長同国橋爪に移る。孫作内光泰初め齋藤龍興に属す、齋藤氏滅びて豊臣氏に仕え近江北郡700石、天正10年(1582)6月、山城国山崎合戦で功あり……。	・全体の文面から橋爪は今泉村の橋詰のことか

No.	文献・書籍名	頁	標題	記述(原文)	備考	3
8	新撰美濃志 昭和6年発行・47 年復刻発行	358 、 359	今泉村	一柳氏宅跡は西本坊の境内の地なり。伊予国河野刑部大輔越智の通直の子太郎右衛門宜高あるいは通直當国に移り土岐頼芸に属す。かくて鞠を蹴る庭のかかりの許にて頼芸の命を受け、苗字を改め一柳とし、刑部大輔と名のれり、あるいは従五位下に叙するともいへり 方縣郡のうち乗竹村、厚見郡のうち日野村、今泉村合わせて三百貫の地を領してここに居り、頼芸大桑退去の後池田郡に移るといふ…。一柳又右衛門直高は一色義龍、斉藤龍興また織田信長に仕えてここに住めり。天正八年七月十日死去六十二才。その子伊豆守直末始名市助は當所に生まれ、織田信忠、豊臣秀吉に仕ふ、直末の弟監物直盛は當所に生まれ、秀吉に仕ふ。天正十八年尾張の葉栗郡黒田の城にうつり、三万五千石領す。或いは當国輕海より繰り黒田にうつり本地三万石に五千石加増ありしともいへり 慶長五年一万五千石を加え伊勢の神戸の城にうつり、のち伊予の小松に移り、六万五千石を領す。そのむすめ直高のむすめは加藤遠江守光泰の室なり。…當村八梅天神は一柳の産土神。加藤遠江守光泰は今泉村のうち橋爪より出てはじめは作内と名のり、信長、秀吉に仕えて軍功あり、天正の中末の頃大垣に在城し…………一柳監物直盛の弟法泉坊を光泰養育して加藤図書と名づけ、今泉に住みしよし、名細記に見えたり	・一柳氏の今泉村住居は数代の系図に記述あり ・誤: 正は、直高兄弟の藤兵衛のむすめ ・直高の娘は誤記、正は直高兄弟藤兵衛のむすめ ・加藤図書、直盛弟は誤記、正は加藤図書は光泰の弟	
9	伊予史談会 1998.4 309号 児玉和夫著	18、 19	謎の武将一柳右近可遊	一柳家の住居があった今泉村西野から東南の方向・指呼の間にある同村橋詰で、のち豊臣秀吉に仕えて活躍する。加藤光泰(作内・遠江守、1537から93)が生まれた。室は一柳藤兵衛の娘(恵照院、～1623・於大洲隠居料500石)とある。『北藤録』。すなわち右近の妹である。光泰の祖父景泰は、大永元(1521)年関東より美濃国に赴き、その子景泰は厚見郡今泉村橋詰に住して70貫の地を領したという。景泰の娘(光泰の妹)は、『今泉村橋詰(西野の誤りであろう)の住人右近(姓氏伝ハラズ)に嫁す。』とある(『北藤録』)。この右近とは、当時西野に住いた一柳右近のことである。……	・右近は秀吉に仕えていたが秀次の大名になるも秀次事件で連座切腹	
10	織豊期研究 2001.11 第3号 織豊期研究会 藤田達夫著	68 69	濃尾武士団と豊臣政権「大洲加藤文書」の世界	秀吉直臣で、のちに甲斐国主となった加藤光泰は、美濃国厚見郡今泉村橋詰(岐阜市)を本拠とする土豪に出目を持つ。… 加藤氏の場合は、同村内の土豪・一柳氏との関係に着目せねばならない。一柳氏は、今泉村西野(岐阜市)を本拠としており、加藤氏と同じく美濃斉藤氏に仕えたのち織田信長に与した。…加藤・一柳両家は相当親密で、同族とってよい間柄だった。…		
厚見郡と多芸郡の両説記述						
11	岐阜市史 通史編 近世	17	黒野城の加藤氏	加藤光泰の出生は、多芸郡橋爪村とも厚見郡橋爪村とも伝えられ、信長と秀吉に仕えて軍功を立てた。		
12	岐阜県 穂積町史	92	第一章 織豊政権の成立	加藤光泰は美濃国(多芸郡橋詰の荘か、あるいは厚見郡今泉村の内ともいう)の出生と伝えられ、……		

美濃国多芸郡を記述

No.	文献・書籍名	頁	標題	記述(原文)	備考
13	武家事紀 上巻 寛文13年(1673) 山鹿素行の著 山鹿素行先生全集刊行会 大正4年発行	504	卷14 加藤光泰	加藤作内光泰、後改還江守 <u>濃州多芸郡橋詰ノ庄ノ人也</u> 、秀吉ニ仕ヘテ度々戦功ヲアラハス、……	・光泰記載年代では最も古い
14	藩翰譜(はんかんぶ)		加藤氏	「加藤遠江守光泰は鎮守府將軍利仁二三代の後裔加藤権兵衛景泰の子也。景泰、 <u>美濃多芸郡橋爪庄七十貫を領して</u> 、初めは守護齊藤氏に属す」	・徳川六代將軍家宣(いえのぶ)の命で白井白石が元禄15年(1702)編著
15	寛政重修諸家譜 高木昭作著 寛政年間(1789年 - 1801年)に江戸幕府が編修した系譜集	774 638	加藤光泰 貞泰 加藤氏	はじめ作内(一説に景教)と称す。天文六年(1537) <u>美濃国多芸郡橋爪に生まれる。父は景泰。家は代々この地で七十貫の地を領したといわれる。</u> その祖を藤原氏に繋げるものが多く、「加賀藤原氏」の略称とも解されている。鎮守府(ちんじゅふ)將軍藤原利仁(としひと)流と称する家が最も著名であるが、藤原北家道長(ほっけみちなが)流を称する家もあり、まます清和(せいわ)源氏武田氏族・桓武(かんむ)平氏金子氏流・三河松平氏流などを称する家もあった。江戸時代利仁流加藤氏は六十二家の多きに及んだ。 利仁流加藤氏は、藤原利仁七代の末裔景通(景道)が加賀介(かがのすけ)に任じたため加藤と号したことに始まるといわれるが、景道は源頼義(よりよし)の郎党であり、その子景貞(景清)は伊勢に下向して伊勢加藤氏の祖となった。そして景道の孫景員(かげかず)、その子景廉(かげかど)・光員(みつかず)はともに源頼朝に勤仕したが、景廉は梶原景時の乱に連座して所領を失い、その子景義(かげよし)が美濃に移り、この流から大洲加藤氏がおこったという。ただし「北藤録」では、大洲加藤氏は光員の子光定(光貞)の流からおこったとし、利仁の曾孫重光(しげみつ)を始祖に仰いでいる。また景廉の次子景長(かげなが)が甲斐に下向し、この流から出た景俊(かげとし)が三河に移り、この流から水口(みづく) (一)伊予国大洲藩主 藤原利仁二十三代の後裔加藤景泰が美濃国多芸郡橋爪を領して齊藤氏に仕えたといい、その子光泰が豊臣秀吉に属して信任され、大垣城將、のち甲斐二十四を……	
16	濃飛偉人伝 全 昭和8年 岐阜縣教育會	135 、 136	加藤光泰 貞泰	加藤権兵衛光泰、初名作内、その先遠山景朝の末弟景義の系に出づ。権兵衛景泰、土岐齊藤氏に属し、 <u>多芸郡橋爪七十貫文を領して</u> 、天文六年光泰を生む。光泰齊藤氏の亡後織田信長に従ひ、元亀元年春羽柴秀吉の手に属し、是より各地に戦功を立つ。	
17	岐阜県人 280.13A 平成16年	97	近世にきらめく男の群像 加藤貞泰	貞泰の父作内は光泰を名乗ったが、 <u>養老郡の土郷の家に生まれ</u> 、齊藤氏の滅んだ後、信長に従い、秀吉の輩下として……	

No.	文献・書籍名	頁	標題	記述(原文)	備考
18	大洲秘録 伊予史談会双書 第7集 昭和58年 初版発行	35	一 御家伝 御系図	大職冠鎌足公後裔鎮守將軍利仁之裔加賀守 吉信廿一代加藤権兵衛尉景泰長男 初名加藤 作内 加藤遠江守光泰公 <u>天文六丁酉年濃州 橋詰村ニテ御誕生(1537)</u>	・橋詰村は、多芸郡にしか ない。厚見郡は今泉村で あり、多芸郡と解釈もでき る
19	新修 大垣市史 通史編1 昭和43年発行	427	二 歴代の 大垣城主 加藤氏・一柳 氏および羽 柴氏	加藤作内光泰(天正13年)景泰の子。加藤氏 は藤原利仁の裔景道より出ている。玄孫景康は 源頼朝に仕え、その裔景助は足利尊氏に仕え て、 <u>美濃国黒野に住し、七世の孫光長は同国橋 爪に移った。光長の子が景泰である。子光泰は 信長について秀吉に仕え、……</u> 一柳伊豆守直末(天正13～17年)一柳氏の遠 祖河野四郎通信の裔宜高は、大永年中伊勢より <u>美濃に来て、土岐頼芸に仕え一柳と改め、厚見 郡西野村に住した。子直高は斉藤氏に仕え、 後、信長に属した。</u>	
20	岐阜県人 吉岡勲著 昭和50年	30	加藤貞泰	貞泰の父作内は光泰を名乗ったが、 <u>養老郡の 土郷に生まれ、斉藤家の滅んだ後、信長に従 い、秀吉の……</u>	
21	上石津町史 昭和54年発行	19、 20、 21 28 ～ 32 ・文政5年8 月 高木系 譜 元 祖 高木丞 之助貞政 ・文政5年8 月 高木系 譜 二 代目 高木彦 左衛門尉貞 久	・加藤光泰 高木党領地 之事 ・加藤光泰 高木衆知行 目録 東京 大学史料編 纂所所蔵	天正19年(1591)11月12日付 <u>加藤光泰、美 濃国の高木党へ領地目録を下す</u> <u>貞政室 加藤権兵衛尉景泰妹、卒年号・享年・ 葬地難相分</u> 貞次摘 譜末二有之彦左衛門尉貞久 実ハ江 州杉沢樋口氏男 貞次女子 養子貞久室 二代目 高木彦左衛門尉貞久 <u>養母 加藤権兵衛尉景泰妹 卒享年・干支・法 号・葬地難相分</u> 実母 由緒難相分 室 養父貞次ノ女 天正八庚辰七月廿日卒、 妙雲院月光受晴大姉、葬地難相分 天正18年貞利ニ隨身、美濃国退去、 <u>甲斐国主加 藤光泰へ奇客、文禄四年貞利御当家へ被召 出、上総国ニテ千石拝領、……</u>	・西濃地区の武将との関 係 ・天正18年(1590)この 年代は、光泰が甲斐国主 (54歳)一年目。 ・高木貞久と一族は光泰 に身を寄せ甲斐国に行 く。光泰から領地を下され た目録。地名から甲斐国と 推定。
22	池田町史 通史編 昭和53年発行 掛 斐郡池田町	218 316	第五章 中世の池田 図表2-20 国枝氏系譜 第二章 江戸時代の 池田の領主 3 旗本加藤 氏の支配	景泰 加藤権兵衛 明徳三年(1392)越前から 来濃 初代加藤平内光直は、 <u>美濃国多芸郡橋爪出 身で、……加藤光泰の三男である。……</u>	・国枝氏系譜(国枝善樹 家蔵)の元祖が景泰？ ・光泰と同じ出身？。光泰 嫡男の貞泰は岐阜橋詰生 まれで平内は貞泰と4才下 の弟で近江国生まれの可 能性。 ・三男は誤記、次男であ る。

No.	文献・書籍名	頁	標題	記述(原文)	備考
23	岐阜市 黒野史誌 昭和62年発行	132	第三章 江戸時代の当地域 加藤光泰	加藤氏の権兵衛景泰は美濃国多芸郡橋爪で七十貫文を領していたが、子光泰に至って勢威を激しく伸張した。光泰は天文6年(1537)橋爪に生まれ、始め齋藤龍興に属したが、後に秀吉に仕えて次々と戦功を...	
24	橋爪の歴史 平成4年発行 村上喜代志著	13、14	五、古橋爪(橋詰)の所在地	橋爪は徳川時代の中期以前は橋詰と書かれていた。これは昔、牧田川に永い橋がかかっていた、その橋の詰に村があったので、この名が付いたと云う。	・厚見郡の橋詰と字名が一致する。 ・橋詰は養老山系東麓を北伊勢より伊勢街道が通
		70～72	二十一、八幡神社のある加藤家	この頭中に「加藤遠江守光泰は鎮守府將軍利仁二十三代の後裔加藤権兵衛景泰の子也。景泰、美濃多芸郡橋爪庄七十貫を領して、初めは守護齊藤氏に属す」とある。...光泰の弟に光定(図書)があり、この子孫が現在橋爪に在住している加藤氏の祖先らしいと言われる。橋爪の伝承では、徳川時代の末ころに大名行列が橋爪を通り、殿様が村人呼んで「この地に加藤と云う者が居らぬか」とたずねた。....	
		126	三十、橋爪の領主と明治以降の変遷	加藤氏が70貫を領して後齋藤氏(道三・義童・童興)に仕えていた(守護土岐氏の時代からか、以前か分かっていない)、また大橋長兵衛尉が高畑で1000疋を給せられていたので、(木下秀吉折紙に「其方給所千疋の儀」、丸毛、加藤、大橋の各氏に分割されていたかも知れない。大橋氏が丸毛氏の指揮下にあったかどうかは分からないが、高畑で勢力を持ち、かなりの家来を持っていたようである。	・大橋長兵衛は、初信長公、後秀吉に仕え、光泰は、浅井との横山砦の功にて秀吉から与力士十余人得る。その頭が長兵衛。高畑1000疋(約25文=25貫=250石)の解説あり。
25	養老町の文化財 平成13年第111号 村上喜代志著	78	近江聖人中江藤樹と橋爪の若宮八幡神社 藩翰譜(はんかんぷ)と加藤氏が存在した理由	「加藤遠江守光泰は鎮守府將軍利仁二十三代の後裔加藤権兵衛景泰の子也。景泰、美濃多芸郡橋爪庄七十貫を領して、初は守護齊藤氏に属す」とある。...加藤氏は、そのまま土着して約380年、土郷として推移したようである。橋爪に現在の加藤家は、加藤氏の宗族が一族を挙げて岐阜城の織田信長に仕えるとき、祖先以来の八幡神社の護持を命じられて残留したものであろう。	
26	養老町の文化財 平成13年第122号 村上喜代志著	166	「義経」関連の西美濃の遺跡 奥州落ちに義経一行、ひそかに養老町を通過	義経29歳の文治三年(1187)....伊勢・美濃を経て奥州に向かったとの情報が届いたのは二月十日でした(吾妻鏡)。...橋爪には鎌倉の命で伊勢より加藤氏が来て警戒していましたが、一行は探索の目をぬけます。加藤氏はそのまま土着して橋爪庄70貫を領します。	
27	入郷400年記念 水奉行 旗本高木家 平成13年発行 上石津町教育委員会	1、2	高木家の由緒	高木氏は清和源氏の出で、先祖は大和より伊勢に移り美濃へ来て戦国期には始め齋藤道三に属し、弘治二年(1556)貞政の時、駒野にいたが後織田信長に従い、永禄十年(1567)今尾城(海津市平田町)及びその附近を与えられ、この地方を根拠とした。天正十二年(1584)信雄の時秀吉が北伊勢へ侵攻、駒野城へ攻め寄せたが、高木一族は法泉寺の門徒と共に退けた。天正18年(1590)織田信雄が秀吉により秋田に配流されると、高木一族も美濃を離れて甲斐に赴き加藤光泰の許に身を寄せていた。	・高木一族が甲斐に赴きの光泰に身を寄せたのは、光泰の叔母(父景泰の妹)が高木貞次に嫁ぎ血縁関係であったことが主な理由か。

No.	文献・書籍名	頁	標題	記述(原文)	備考
28	ふるさと橋爪 平成15年 橋爪地区推進連 絡会	25	八幡神社	…現在、 <u>加藤家の私社</u> になっていますが、加藤家の祖先は文治3年(1187)頃、源義経を追補するため伊勢より橋爪に派遣されて土着したようです。…	
		31	加藤家と橋爪	<u>橋爪東南部の十日市畑とか十日市場と呼ばれる地域は、昔市場が立っていたところです。この地は、源義経を追補するために伊勢より派遣された加藤家が、そのまま土着して七十貫の所領を持っていました。稲葉山城の守護代斉藤家に属していましたが、永禄10年(1567)織田信長が稲葉山城を占拠した前後に、加藤家一族は橋爪を出て織田信長に仕え、さらに羽柴秀吉に属して後には、甲斐国24万石の大名になっています。…加藤家は信長に仕えるため出て行くときで、其の跡を高木氏が受け継いだようです。高木氏は持参してきた武具や金品を加藤氏に譲渡し、その代償として領地を継承したと思われる。</u>	
		32	加藤権兵衛景泰	始祖は藤原氏で藤原北家の血を引く鎮守府將軍、利仁二十三代の後裔といひます。利仁の七代目景道の時に加藤氏を名乗り、その孫は伊勢に居住していましたが、 <u>文治三年(1187)頃奥州へ落ちる源義経を捕らえるために橋爪に派遣され、そのまま土着しました。</u>	
		32	加藤遠江守光泰	景泰の嫡男で通称作内といひます。永禄十年(1567)織田信長は岐阜城を攻略しましたが、 <u>光泰は橋爪を出て一族を挙げて信長に仕えました。信長亡き後、秀吉に仕え軍功もあつて近江国高島城主となり、……</u>	
		260	橋爪の歴史年表	1567 永禄十年 織田信長岐阜城に入る。 <u>この頃加藤光泰橋爪を出て信長に仕え、三河碧海高木庄より高木信成が来て橋爪に土着。</u>	
29	交代寄合高木家の研究 2004年 伊藤孝幸著	23	高木家と幕藩領主諸家血縁関係の諸家	高木家の先祖書のひとつである <u>文政五(1822)年八月日付「高木系譜」</u> によって高木家の縁組み相手のうちの幕藩武家領主の面々を一覧化提示したものが次の[別表1] 高木家の血縁関係にある幕藩領主諸家 通番 1人名 加藤権兵衛景泰 続柄 初代貞政嫡男室の兄 備考 美濃国多芸郡内の領主、加藤家は元和三年(1617)から伊予大洲藩主(表高六万石)	・美濃国多芸郡内の領主(代々70貫此地領すの記述によるのか、その他の記述からか?)
30	岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋後主屋等建造物調査報告書 平成21年発行 大垣市教育委員会	3	旗本西高木家と陣屋の概要	高木氏は清和源氏の流れで大和の高木村を居所としていたところから高木姓をなのったという。室町寺代後期に美濃上石津に移り、貞政の代には駒野(海津市南濃町)に居城を構えて本拠とした。貞政を継いだ貞久は織田信長に従い今尾(海津市平田町)を治め、その後は織田信雄配下となり豊臣時代には甲斐国の加藤光泰に身を寄せた。…	
31	大垣市上石津郷土資料館	ハネ ル	交代寄合高木家系譜(西暦1500～1650)	高木貞政の子に高木貞次 天文16年(1554)3月三日寂 病弱にて入道し号を西願とする。貞次の室は加藤景泰の妹 加藤景泰→美濃黒野城主→甲斐国大名 二四万石・加藤光泰(豊臣秀吉の家臣)	・誤:黒野城主は光泰の後が正。

No.	文献・書籍名	頁	標題	記述(原文)	備考
32	研究会内部資料 平成22年 (2010.06.27) 黒野城と加藤貞泰 公研究会 浜野英 二著	1	加藤氏と一 柳氏の縁戚 関係(一部)	加藤光泰は濃州橋詰庄(多芸郡橋爪村)出身の土豪と伝えられる。北藤録によれば父景泰について「美濃国橋詰の荘に住居して七拾貫の地を領す」とあるが光泰は「美濃国厚見郡今泉村橋詰の荘に生る。世々此庄に居て七拾貫の地を領せり」と記された箇所もある。当時の今泉村は加藤氏ではなく一柳宜高の所領だったので何らかの事情により地名を混同したと思われる。……	
33	北藤録 伊予史談会双書 第6集 昭和57年初版発 行北藤録	50	巻之八 光泰之伝下	又一書ニ、加藤兵太良次カ父加藤総左衛門良正ハ、濃州橋詰ノ庄ノ郷土ナリ、其家光泰ノ居宅ノ傍ナレハ常ニ懇志ナリシカ、光泰ノ父権兵衛尉景泰病危ニ臨ミ、総左衛門ヲ招キケルハ、我子光泰勇気熾ニシテ豪俠人ニ過タレハ、其身甚危シ、汝能心ヲ添テ助ヨト遺託ス、其後、光泰秀吉公ニ登庸セラレシ頃、総左衛門末期ニ其妻ニ向ヒ、嫡子其ハ家ヲ継シムヘシ、次男兵太ハ光泰ヘ頼ミ士官致サスヘシト云意リテ死ス、其妻諾ストイヘトモ、其頃光泰ハ爰彼コト軍旅ニ暇ナク、又女ノ身ノ尋行ン事モ心ニ任セサレハ、徒ラニ過シケルニ、年経テ光泰戦場ヘ赴クトテ故郷橋詰ノ辺リヲ通りシニ、往時ヲ慕ヒ彼良正カ事ヲ思出シ近侍ノ輩ニ尋サセシニ、折節道ノ傍ニ一人ノ寡婦六、七歳ノ男子ヲ伴ヒテ立タリ、光泰ノ近臣総左衛門カ行衛ヤ知リタルト問フ、彼女答ケルハ、総左衛門ハ先年身罷リ我々ハ其妻子ナリ、夫末期ニ及ヒ此兵太ヲ君ニ差上ヨト申置リ、憐ミ玉ハレト涙ヲ流シ語リケレハ、光泰コレヲ聴、不便ノ次第カナ、心安カレ、勞リ召仕ヘシ、去ナカラ戦場ヘ幼稚モ連難シ、幸江州ノ領所モ程近シトテ、送り遺シ懇ニ養育ス、成人ノ後宗徒ノ者トシテ武功ヲ顕シケルトイヘリ。	・濃州橋詰ノ庄の郷土は、多芸郡とも、厚見郡ともいえるが、 ・光泰戦場ヘ赴クトテ故郷橋詰ノ辺リヲ通り ・幸江州ノ領所モ程近シトテは、岐阜(稲葉)城下の厚見郡端詰ではなく、多芸郡の橋詰であると理解することが出来る。
34	藩臣家譜		大洲藩 文 政期に編纂 ネット「加藤 家の家臣と 黒野」より(東 昇氏記)	地名に残る「徳田屋敷」の徳田氏は、「藩臣家譜」によると徳田藤左衛門為泰である。為泰は「生国美濃国厚見郡徳田村」とあり、続けて「曹溪院様初濃州橋詰邑ヨリ御出世之時ヨリ相勤」と、 <u>光泰の出身地の橋詰邑</u> (岐阜市橋詰町)時代からの家臣であった。藩士として続く。	・大洲藩の「藩臣家譜」は文政期に編纂され、加藤家の知行取276家歴代1527人の記事が記されている。 ・橋詰邑の村は多芸郡で、厚見郡橋詰の地は今泉村である。
35	山梨県「洞雲寺」 寺史 平成14年5 月発行 洞雲寺 400年祭典委員会 4	41	洞雲寺縁起 光泰のこと	光泰の先祖は、かつて源頼信の郎党となり関東に下り、甲斐国古郡庄(北都留郡)を領して代々甲斐・武蔵の地で活躍した。光泰の父景泰の時、関東を去って美濃国(岐阜)に移ったという。光泰天文6年(1537)美濃多紀郡橋爪の庄にて生まれる。光泰はじめ斉藤竜興に仕え、	・多紀郡は多芸群の誤記 ・洞雲寺境内裏に、當山開基した光泰の供養塔が建つ ・光泰公の遺品左文字短刀所蔵
		50		光泰の父は美濃国多芸郡橋爪70貫の小名主。	

その他

No.	文献・書籍名	頁	標題	記述(原文)	備考
36	美濃国諸家系譜 平成18年発行 歴史伝承フォーラム 田中豊氏	165～ 183 ～	加藤氏系図	光泰は、加藤次景廉の孫で美濃国恵那郡岩村に住した景村(加藤七郎・遠山左衛門尉)の後裔 光泰の父景泰(加藤権兵衛尉)は、美濃国方縣郡土井村に住。土岐左京大夫頼芸に仕え。天文十六年八月十四日戦死四十四歳。祖父の光景(加藤修理権大夫)は、土岐美濃守政房に仕え方縣郡鶴飼黒野に住。その祖光長(加藤左衛門尉)は、方縣郡黒野城主也。実は池田郡本郷城主安藤伊賀民部少輔守長の子也。その祖光基(加藤権大夫)は方縣郡黒野村に住。それ以前の祖は恵那郡に住。	・東京大学史料編纂所蔵、原文と原文の横に印刷文字にしたものを併記したものです。作者不明、江戸末期の研究書
37	武功夜話 巻四 1987年発行 1991年10刷発行 新人物往来社	254	越前敦賀表、金ヶ崎責め	一、加藤作内、この人尾州上の郡下津郷の住人、州股駆け付け衆。1、一柳勘左衛門、同市助(直末)、尾州葉栗郡の住人、州股駆け付け衆。	・誤記:尾州・・・はいずれも間違いのようである。
38	播州小野藩一柳家史料 平成11年3月31日 小野市発行 (岐阜市 内堀信雄氏より)	6、 7、 281	由緒書	予州を浪人した先祖(河野)は、所縁を辿って美濃の赴き「土岐殿」に仕えた。「大永年間(1521～27)とすると美濃の守護大名は土岐頼芸(1501～82)である。一柳又右衛門直高は、岐阜の町裏の西野に住む百姓であったが、当時美濃領内には「がんと」と称する盗賊の類が横行。美濃国主はその取り締まりに高10石～20石の役料高を与え大勢の目明しを抱えていたが、その元締め役として4人の組頭を任命。堀・谷・加藤・一柳がそれで、当時百姓たちは「四天王」とよんだ。平素は「がんと」追捕に当たり。国主出陣の時は其の留守居を勤め、外敵侵入の時は軍役を勤めたという。	・光泰の父景泰の頃、光泰と直高の弟藤兵衛の子は濃い姻戚関係になる。加藤景泰、光泰はこの頃に今泉村の橋詰に入ったと思われる。

考察

・加藤光泰は斎藤龍興に仕えていたが信長の岐阜攻めで、光泰の奮闘を見て信長に抜擢され、秀吉に仕えることになった。この頃は今泉村橋詰に住していたようである。しかし加藤光泰生誕の地と世々七十貫を領した地は、上記資料

加藤氏のルーツ

- ・加藤氏の系図には、光泰の父景泰より以前のルーツが複数説存在する。「北藤録」の加藤世系(乾)と(坤)、美濃国諸家系譜「加藤氏」、日本姓氏家系総覧(新人物往来社)などが存在するが、いずれも景泰以前に相違が見られる。
- ・加藤氏のルーツについて景泰以前の足取りは、「関東→美濃国多芸郡」、「関東→美濃国厚見郡」、「美濃国恵那郡→美濃国方縣郡鶴飼黒野・土井村」、「伊勢→美濃国多芸郡」、「美濃国方縣郡黒野→多芸郡→方縣郡または厚見郡」とありいずれが正しいか不明。

加藤氏と美濃衆の関係

・加藤氏は土岐氏、斎藤氏の頃から美濃国内の郷士である本巢郡の安藤氏(光泰の母)、上石津郡の高木氏(景泰の妹)、厚見郡の一柳氏と血縁関係(景泰の妻、娘、光泰の妻など)があった。特に景泰のとき、一柳氏とは非常に強い姻戚関係で結ばれている。

・安藤氏との関係

・「北藤録」の光泰について、母ハ濃州ノ人、其姓氏詳ナラス。「美濃国諸家系譜」の安藤氏系図には、安藤守元(安藤伊織)本巢郡小柿城ニ住、土岐左京大夫頼藝ニ仕。女子 加藤光泰母。

・高木氏との関係

・大和から美濃国上石津郡(昔は多芸郡内に石津郡があり)に入ってきた高木氏と加藤氏の血縁関係が景泰の代にあった。

・一柳氏との関係

・一柳氏は「美濃国諸家系譜」によると河野通定が厚見郡今泉村に入り通宣、直高、直季まで四代が住む。加藤氏と一柳氏は、景泰の時と光泰の代に両家とは非常に濃い血縁関係が生まれていた。厚見郡今泉村の一柳氏と加藤氏の親密な血縁関係は、景泰の代から始まっている。

・美濃で「がんとう」を取締まる四天王と呼ばれた堀、谷、加藤、一柳は、美濃斎藤氏の重臣だった西美濃三人衆の武将、稲葉良通、安藤守就、氏家直元の陰に隠れた存在であった。四天王は後にいずれも秀吉に仕える大名になる。

加藤貞泰以前の加藤氏と黒野との関係

・「美濃国諸家系譜」には、景泰、光景、光長、光基とさかのぼり先祖数代にわたり、美濃国方縣郡内の鵜飼黒野などに住んだ記述あり。なかでも光長は、「加藤左衛門尉 方縣郡黒野城主也」と貞泰と混同する履歴。この光長は、「実ハ池田郡本郷城主安藤伊賀民部小輔守長之子也 文亀三年(1503) 八月八日死、六一才」と記す。

・光泰の父景泰が方縣郡の土井村(土居村ようで鷺山の北に上土居、下土居が現存する)に住。祖父の光景(加藤修理権大夫)は、土岐美濃守政房に仕え方縣郡鵜飼黒野に住。これが事実だとすると、光泰は橋詰(橋爪)ではなく土居村や鵜飼黒野あたりで生まれた可能性も、また別の加藤家も考えられる。また土岐氏は、明応4年(1495)土岐定頼が土居村近くの枝広館が洪水で流され大桑城に移っている。天文元年(1532)土岐頼藝は長良の新邸が大洪水で壊れ大桑城に移り居城していた。景泰は天文16年丁未(1547)8月14日、戦死44歳。加藤家が土岐氏に仕え黒野に住んでいた頃の出来事である。(美濃国諸家系譜)

・これらは厚見郡説、多芸郡説にも該当しにくいルーツである。

二説が存在する理由

・加藤家などに光泰以前の正確な記録が残っていない。

・美濃国に二つの「はしづめ」(橋詰と橋爪)が存在するために混同した可能性がある。

・加藤氏家史の大洲史料が優先されるが、光泰が生まれ住んだ地元美濃の記録の信憑性も無視できない。

・戦国時代の美濃国は土岐氏、斎藤氏の拠点であった厚見郡と美濃から近江、京への街道沿いの多芸郡は、どちらも人の交流が盛んな土地である。加藤氏がいずれにも居住した可能性も考えられる。

・貞泰の生誕地は、今まで加藤氏家譜に近江国磯野村(長浜)生まれの記述が定説でしたが、平成26年、研究会員による高野山墓碑調査で「生国濃州岐阜橋詰」の刻銘が判明。建立者が貞泰嫡男五郎八(泰興公の幼名)であり確信ができた。岐阜橋詰は厚見郡今泉村で、光泰も妻子も住んでいたことになる。おそらく信長の岐阜在城の頃からの屋敷が橋詰にあったことになる。但し、光泰の生誕地だったかは不明である。

厚見郡説の疑問点

・「大洲秘録」、「北藤録」において系図と伝記の記載に違いが見られる。系図には、厚見郡の名が橋詰の庄と表現。これは濃州の厚見郡とも多芸郡どちらの地にも該当する。伝記にのみ厚見郡の名が出てくる。伝記で美濃国橋詰ノ庄と同州今泉橋詰と区別しているが、これらは同一地であるように混同するが、これらは多芸郡と厚見郡の表現にもとれる。伝記よりも系図を重要視すると多芸郡説も有力。

・「世々此庄ニ居テ七十貫ノ地ヲ領セリ」とあるが、広辞苑によると「世々」とは代を重ねること。だいたい、それぞれの世の意味で、光泰の父景泰よりも前の代も含まれると考えられるが、「北藤録」では、景泰の父景秀は関東の古川御所に仕えていたが大永元年(1521)頃、関東から美濃国に来ている。光泰が生まれるまで僅か16年である。景秀は関東から来た年に70貫を領することが出来るのであろうか？。

・「美濃明細記」の美濃国郡村記の厚見郡今泉村は、当時の村高ではないが約1000石相当である、多芸郡橋爪村は約500石。今泉村は一柳氏が住し同時期に一村内で加藤氏と一柳氏がそれぞれが領することはあるのであろうか？

11

・今泉村説で、同村内に一柳氏と加藤氏が居たから血縁関係が深いと考えられるが、例えば「美濃国諸系譜」に「貞泰弟に某 加藤権右衛門 図書 今泉村ニ住ス。実は一柳監物直盛之弟也。始名、法泉坊ト云。」とあり、これは光泰の弟、図書ではなく、貞泰の姉に養子となった一柳信濃と思われる。間違った系図になっている。信濃は、今泉で生まれ育った一柳右近の長男で、信濃は早くから光泰の家臣で、光泰の長女に養子で加藤家に入っている。
加藤氏が今泉に住んでいたという痕跡が見当たらない。

・「新撰美濃志」では、一柳氏一族が今泉村村内の位置や、神社名が残り、住んだ記述や今泉村、日野村、方縣郡乗竹村を領したとあるが、加藤氏が住んでいたとする証しの記述が見当たらない。

・光泰始メ美濃国ノ国主齋藤藤右衛門大夫竜興ニ仕。…竜興没落ノ後、光泰彼地ヲ去リ江州ニ蟄居スル由ヲ…その後、「北藤録」に一書ニ曰。永禄六年(1563)信長の斎藤竜興の稲葉山攻めで、稲葉山近辺一里四方悉ク放火シ裸城ニ成ル・竜興追放し、竹中半兵衛重治と加藤作内景教(二十七歳のとき)を秀吉に下さる。加藤作内は信長公より三百貫下さる。此より秀吉に従う。稲葉山近辺一里四方は今泉村も含まれるような広さであり、も今泉村内の加藤家の屋敷も焼かれていた可能性もある。

多芸郡説の疑問点

- ・景泰の代に高木氏と血縁関係になっているが、代々此の地で70貫を領していたという証しが明確でない。
- ・橋爪村に光泰生誕の地の証しが不明。

加藤家の足取り・仮説(案)

・上記の加藤氏資料を満足させた仮説を考えてみた。無理なところもあるが、概ね次のような家臣団の移動があったかもしれない。

・加藤氏は土岐に仕え、文明年間(1474頃)頃から美濃国方縣郡黒野に住む。大永元年(1521)(景泰18才)から多芸郡橋詰に移り70貫を領す。この間の天文6年(1537)光泰誕生。天文16年頃(1547)方縣郡土居に移り土岐市に仕える。土岐頼藝が大桑から尾張の織田家に逃れたとき同行し、【※光泰は尾張中島郡下津(稲沢市)に住み、弘治2年(1556)(光泰18才)前に瀬戸城主になり稲生合戦で桜川で戦い織田信長に仕える。】斎藤氏の稲葉城が永禄7年(1564)に美濃衆により一時占拠された頃(光泰27才)、斎藤氏が滅亡したころ、光泰は近江又は多芸郡橋爪村に蟄居していたが信長の目に留まり、秀吉の家臣になり、岐阜城下の厚見郡今泉村橋詰に移る。この地で貞泰誕生。この地で光泰が父景泰の墓を高野山に建立。元龜3年(1572)(光泰35才)浅井横山城攻略で重症、近江磯野村に知行700貫、以後近江、大垣、郡山、近江、甲斐へ。貞泰は黒野、米子、大洲へと移る。

※【 】内は尾張資料によるも信ぴょう性に欠ける。しかしこの頃美濃での加藤氏の記述資料が見つからないが空白が埋まる。

以上



加藤氏家紋 蛇の目紋